

金言

信

NO.19  
1968  
10.8

東京教育大學全  
學斗争委員会(隼)

教育大のすべての学友諸君、  
ヒリオケストラ下キミ戦斗的ヒ  
斗つている全学の学友諸君、

10月の全学統決起集会はほんものと聞いていたが、全学共斗会議に結集する執行部系諸君は、本館封鎖の一実力解除を認めざりし、文自斗の斗争を破壊す

全学友はあらゆる分断策動をはねのけ 全学スト 本郷鎮 をもつ  
てともに前進しよう! 昨日理農執行部の挑癲的行動を糾  
弾しあくまで 豊富年委員の自己批判を要求する

とか、あしからずつづけた理由で、一方的に破棄してきた。これ、一連のことは、彼らの、斗争論理の中に於いて我々学生を革奪する圧力のための一分子としてしか見ていいことの複雑さをしてしまっていい。さらに、民主的し教官の尾押し節取としてしか見ていいことの複雑さをものであると同時に、学生の「要求」をくみあげるといつまでもことの無内容性、ギマン性を如実に諸るものである。

らの行動をなんの大衆的に明かにすることなく、学長と交渉を行い、大無闇交の意義を根底から破壊する。本学当局の論理は多數で会うと混乱する。のつた形でボス交を行なつた。

このことは明らかに文官制に結果する学長の孤立化をはかるものである。しかし、それは、このことヒを事前に察知した多くの教育大学校によつて、この分裂運動は紛糾され、彼らの犯罪性は彼らが自己批判を行なうことによって明らかとなつたことは、すでに承知のことであつた。しかし、彼ら執行部系諸君は、やの自己批判に対し、「おれは暴力的に行なわれたから無効だ」と

どなく、ただ單に、巨富突入も、自己目的化した行動として企図していたのだ。意見の立いと、何う論理的に上場しようとはせず、農副委員長が約束の日五〇二で用かれり予定の集会をホイコットしたことによる論議的表現されていら、ボス女と挑発行動による攻撃の氣立化をげかうとしていることは、大衆運動を根底的に破壊するものとして断固として糾弾しえねばならぬ。文部省・大字当局からの分裂、派閥争奪が極めて強く打つては、現在、我々の斗争は、明確に敵に向いた斗争であらねばならぬときには、月のセクト的利害の中に奔走する彼ら「全共斗」諸者は、自らの行した行為に対し、自己批判すべきである。そして、至るのすべての学友は、我々を斗争の道義、物理力としてしか見ていない彼らから誤別し、創造的、戦闘的に斗争をするべきではないか！

手渡すという理由もつて、巨館内にはいり、再度巨館内でモ隊列を組んだ。学友諸君は文自斗に「要望書」を渡すのに、何故、多数の学生でビケットと共に破壊し巨館に入らせるのが、これは、文自斗の斗争の破壊をめざす、挑発行動以外の何物でもないことは明白である。これに対し文自斗の多数の学友が、生々もやむを得てこのはじめよりも当然のことではないか。實際、文自斗の学友と彼等との間に外なりのトラブルがあつたが、その原因はすべて巨館に突入した「全共斗」系諸君によるところ、すべての学友が確認できぬと思う。さらに、ハリケーンを破壊しようとした文学部「全学連連絡会議」の分裂主義的扶助の学生は、明確に自らのセクトの影響にのみ、斗争を歪曲せんとする諸者であつて、とも明確に行つたのである。そして、彼らは「うどこの「要望書」は、文自斗に渡す様子もなく、又、誰が持つていつのかも、分らなければといった結果で、彼らは最初から、「要望書」と渡す意図な